

ベティ・フリーダン著、ブリジッド・オファレ編
女性労働問題研究会・労働と福祉部会訳、杉本貴代栄解説

『ビヨンド・ジェンダー』

——仕事と家族の新しい政治学』

評者：有賀 夏紀

1990年代初め、アメリカではいわゆる「バックラッシュ」が広がっていた。公民権運動やフェミニズム運動の展開するなかで、平等な権利を獲得した黒人を始めとするマイノリティや女性たちが職場や大学に進出していくことに対する「怒れる白人男性」たちの「復権」のための運動とも言える。スーザン・ファルデー『バックラッシュ』（1991）は、80年代アメリカのメディアがバックラッシュに果たした役割を示しているが、それによれば、メディアは競うように、いかにフェミニズムが女性を家庭から押し出し不幸にしたかを伝えた。このようなバックラッシュの背景には、アメリカ経済の低迷があり、「ダウンサイジング」は多くの白人男性管理職から職を奪っていった。その間、管理職に就く女性は増加し、その他の大多数の女性が働くサービス業は拡大していたので、全体として女性の雇用は増え、男女の賃金格差は縮小し、女性の収入は80年代に男性の60%だったのが90年代半ばには72%になった。これは男性たちの賃金が下がったことにも起因する相対的な女性の賃金の上昇であり、「消極的公平」とよばれる現象だった。94年3月、『エコノミスト』は、女性が求人市場のサクセスストーリーであることを指摘した上で、「女性が男性

を職場から追いやったのか？」という問を投げかけている（本書p.27）。

ベティ・フリーダンは、男女平等の追求が「男性を職場から追い」やるようなことにならないためには、「女性と男性とコミュニティに関する新しいパラダイム」へのシフトが必要であると考え、1994年から2年間、ワシントンD.C.のウッドロー・ウィルソン国際研究センターで「ニューパラダイム・セミナー」を開催し、女性組織指導者、AFL-CIOの労働組合指導者、ブルッキングズ研究所、経済学者、政治学者等とともに、新しいパラダイムの構築に向けて討議を重ねた。本書『ビヨンド・ジェンダー』は、フリーダがこのセミナーの記録に基づいて書いた*Beyond Gender*（1997）の邦訳書である。フリーダンは、今日女性が必要なのは、男女の関係を対立的な支配関係で捉える「性の政治学」や差別された女性としての集団的な帰属意識に基づく「アイデンティティの政治学」、女性の問題を第一に考える「フェミニズム」ではなく、「新しいパラダイム」であると訴える。

ベティ・フリーダンは、周知のように、1963年『女らしさの神話』（邦訳『新しい女性の創造』）を出版し、60年代以降世界中に広がった第二波フェミニズム運動の引き金となった人である。『女らしさの神話』において、フリーダンは、郊外で豊かな生活を享受する高等教育を受けた専業主婦が、家事・育児に専念する女性を理想とする「女らしさの神話」のために、家庭の中に閉じこめられ、抑圧されていると感じている実態を明らかにした。そして、女性も家庭の外に出て働き、経済的に自立することによって、人間としての自己を全うすべきだと主張した。『女らしさの神話』は多くの中産階級女性の共感を呼び、中産階級女性の鬱積した不満は爆発し、伝統的なジェンダー役割を打破しようとするフェミニズム運動へと向かっていっ

た。66年には、これらの女性たちの力を結集して全米女性会議NOWが設立され、フリーダンはその初代会長として、70年までアメリカのフェミニズム運動を率いた。しかし、運動の進行とともに、若い世代のフェミニストたちが政治的法的平等権だけでなく、中絶、レイプ、同性愛などセクシュアリティの問題も含めた女性解放へと関心を広げ、アメリカのフェミニズム運動が全体として急進化するにつれ、フリーダンは指導者としての地位を退いていった。そして1980年、『セカンド・ステージ』を著し、女性はもはや家族を否定したり男性と敵対したりするのではなく、家族や母性を大事にし、男性、職業とともに生きる「第二の段階」に進むべきだと主張し、フリーダンは、『女らしさの神話』で示された妻として母としての女性の役割を軽視ないし否定するフェミニズムから、伝統的家族を支持する保守的立場に転向したと見られるようになった。その後、アメリカのフェミニズムは、従来の中産階級白人女性中心から、黒人、レズビアンなどを含めたさまざまな勢力が加わり、多様化・急進化していったが、フリーダンは家族の擁護、男性との共生を主張し、執筆・講演などを通して独自に活動を続けていった。

このようなフリーダンは、フェミニズムと決別したかのように言われることもあるが、そうなのだろうか。フリーダンは家族の擁護と言うとき、家父長制に基づく伝統的家族の復活を考えているのではなく、男女が平等の関係に立ちながら家庭と仕事を両立する生き方を追求しているものであり、フリーダンはフェミニストであることに変わりはないのである。

『ピヨンド・ジェンダー』は、フェミニスト、フリーダンの思想展開の延長線上で、1990年代初め失業、貧困、犯罪などがむしばむアメリカ社会の改革を模索するなかで生まれたものである。フリーダンは目指すのは、子どもの養育の

場としての家族の安定であり、母親と父親がいる家族を理想としてはいるが、コミュニティの役割や「広い意味での家族」も重視する。家族は伝統的なジェンダー役割に基づくものではなく、男も女も平等に家事・育児を行い、職場でも男女の平等が確保されなければならないと考える。そして、80年代以降の共和党政権下における、マイノリティや貧困者を救済するための福祉政策、環境、労働者の安全、教育・芸術などに関する社会的文化的政策の後退を問題視し、民主党大統領クリントンによる、「われわれにおなじみの社会福祉の廃止」「大きな政府の終焉」を掲げたAFDC（貧困家庭への児童手当扶助の政策）の廃止などの「福祉改革」を批判し、アメリカ政治の一般的な保守化を嘆く。

フリーダンは、このような政治的保守化を阻止することができなかった今日のフェミニズム運動の責任を問う。すなわち、最近の調査結果からも明らかなように、アメリカの女性たちが一番重要だと考えている問題は仕事と家庭の両立であるにも拘わらず、近年、フェミニスト組織のエネルギーは、中絶、レイプ、ポルノといった男性を敵視する「性の政治学」的な問題に注がれ、経済上の男女平等や育児と仕事の両立が可能な社会構造をつくる努力をしてこなかったというのである。その結果、AFDC廃止を阻止することもできなかったとする。

平等な男女の関係に立って家族と子どもを守る社会を建設するためには、男性を敵にするフェミニズムでなく、男性と協力することを主眼とするパラダイムへとシフトすべきであるとフリーダンは主張するが、具体的には何ができるのだろうか。セミナーの参加者が示唆しフリーダンは提唱する方策は、ジョブ・シェアリング、フレックス・タイムなどである。これらの新しい労働形態は、人員削減に対応しながら、個人の労働時間を減らし、男女とも家庭で過ご

す時間を増やすことにもなるとする。

このような、フリーダンの「家族の復権」は、フェミニズムを否定しているのではない。フェミニズムを超えた新しいパラダイムを唱えるとき、新しいフェミニズムを考えているのである。フリーダンは、トマス・クーンの『科学革命の構造』（1962）からパラダイムシフトの概念を取り入れたのであるが、クーンを引いて、パラダイムシフトとは「今日までの発展を導いた古いパラダイムを捨て去ることではなく」、そこでは「かつてのパラダイムの大部分は具体的な業績として新しいパラダイムに取り込まれる」としている。つまり、「ニューパラダイム」も「今日までの発展を導いた」フェミニズムの上に築かれることになる。

次のことから、フリーダンが保守に転じたとは言えまい。例えば、就学前児童の教育を行うヘッド・スタート、妊婦・母親や幼児のための栄養補給プログラム、子どもの予防注射などへの政府援助を廃止しようとする共和党の動きを、マイノリティや女性に対するバックラッシュとして非難する。そして、「均衡予算ヒステリー」の圧力の下で、クリントンが行った「福祉改革」も貧しい女性と子どもたちを中産階級の経済的不満のスケープゴートとするものであると批判する。フリーダンは国の補助金による保育所や健康保険制度などの福祉政策を支持するのである。また、近年、保守派から激しい攻撃を受けているアフーマティヴ・アクションについても、女性やマイノリティに仕事を解放する上で大きな役割を果たしてきたと高く評価し、擁護する立場に立つ。その際、「ニューパラダイム・セミナー」の報告から、多様性を確保するためにアフーマティヴ・アクションを採用し、経営上成果をあげているゼロックスのような企業の例も紹介している。さらにまた、フリーダンはセクシュアリティの解

放よりは人々の生活を優先し、国は家族の保護や子どもの養育のために積極的に援助しなければならないとするが、その際フリーダンの考える「家族」は伝統的なジェンダー役割によって維持される家族ではない。日本で多くの支持を得た松田道雄の『家族の復権』（2002）が意味する伝統的な「家族」とはむしろ対立する家族なのである。

フリーダンは本書において、1980年代から加速し、民主党のクリントン政権も巻き込んでいる保守化の動きのなかで、経済的バックラッシュに大きな危機感を感じ、多くのフェミニストたちがセクシュアリティ解放の路線を追求しているが、そんなことではこの保守化の流れはくい止めることはできないと警告する。その精力をこれまで獲得してきた経済的平等の確保・推進に向けるべきであり、そのためには、女性が男性と共に営む、家庭という足場を固めることが重要だと主張する。

女性よりは家族を中心に考える『セカンド・ステージ』や本書によって、90年代には、ベティ・フリーダンは保守派、せいぜい白人中産階級の穏健派リベラルとの評価が定着していた。しかし、1998年、これをくつがえすような本、ダニエル・ホロウィッツ『ベティ・フリーダンと「女らしさの神話」の形成—アメリカの左翼、冷戦、現代フェミニズム』（Daniel Horowitz, *Betty Friedan and the Making of the Feminine Mystique: The American Left, The Cold War, and Modern Feminism*）が出版された。この本は、フリーダンが『女らしさの神話』のなかで、自分もこの神話によって家庭に閉じこめられた郊外の中産階級の専業主婦であり、自分のフェミニズムはその生活への不満から出てきたと書いているが、それは事実と反している。フリーダンは学生時代、また、急進的な労働組合新聞の記者だった時代から既にフェミニ

ストだったことを示した。ホロウィッツは、フリーダンが単に、一般に考えられているような中産階級出身の穏健派リベラルではなく、筋金入りのラディカルであることを明らかにしたのであるが、ネオコンのデイヴィド・ホロウィッツ（ダニエル・ホロウィッツとは無関係）の評論「ベティ・フリーダンの秘められた共産主義者としての過去」（Betty Friedan's Secret Communist Past, *Salon* January 18, 1999）のような、保守派によるリベラル派攻撃の材料にも利用された。フリーダンは、『女らしさの神話』において事実と反して自分を中産階級の主婦として描いたとして批判されたのであるが、本が出た1963年という時代、そしてフリーダンが意図していた本の読者層を考えると、フリーダンの立場は理解できる。当時は冷戦のさなかで反共主義が広がっていた時代だった。そのようなときに、反資本主義的な活動家としての自分を前面に出していたら、本は一般に見向きもされなかったであろう。フリーダンは自分も郊外に住む中産階級の専業主婦であることを（執筆当時は事実であった）強調することにより、アメリカ社会の多数派である中産階級の女性に訴え、女性解放への共感を呼び起こそうとしていたのだ。ダニエル・ホロウィッツの批判は、フリーダンの業績を積極的に評価する立場からの批判であり、過去の経歴を明らかにすることにより、フリーダンのフェミニズムが単に中産階級女性の利益にとらわれたものではなく、労働者階級の立場も理解する広い社会的視野に立つものであったことが示されたといえる。『ビヨンド・ジェンダー』に見られる「家族の復権」の主張も、貧困や失業などの経済問題を中心に置く階級的視点を含んだフリーダンのフェミニズムの文脈から考えなければならない。

ただ、『ビヨンド・ジェンダー』の前提になっている女性の社会進出の状況認識は、現実とは多少ずれがあるようにも思える。前述した「消極的公平」の達成は一部のエリート女性について言えることで、大半の女性にとっては職場では「不公平」の方が問題である。そのエリート女性にしても、「ガラスの天井」が大きく立ちはだかっている。また、フリーダンが軽視するセクシュアリティの問題は、フリーダン自身が重視する経済的安定や子どもの養育と無関係ではない。例えば、セクシュアルハラスメントもゲイの権利も個人の労働の権利と密接に関わることなのである。

『ビヨンド・ジェンダー』は、90年代のニューエコノミーの下での女性の職場進出と女性の貧困の進行、そして政治の保守化というアメリカの状況に対処するための方法を提起した本である。新しい社会をつくる新しいパラダイムの必要性やそれに基づくジョブ・シェアリングといった労働形態などの具体策も提唱しており、これから女性の職場進出がさらに進むであろう日本にとっても参考になるだろう。

本邦訳書の末尾に用語解説がついているのは便利でありがたい。また、杉本貴代栄氏による、フリーダンおよびアメリカ女性の現状に関する解説も有益であり、邦訳書としての本書の価値を高めている。

（ベティ・フリーダン著、ブリジット・オフアレ編、女性労働問題研究会・労働と福祉部会訳、杉本貴代栄解説『ビヨンド・ジェンダー — 仕事と家族の新しい政治学』青木書店 2003年4月刊、定価2500円＋税）

（あるが・なつき 埼玉大学教養学部教授）